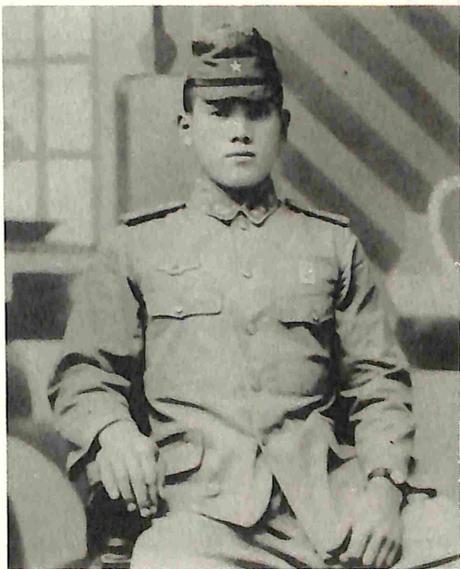


欠陥人間

白川章一



◎大正十五年十二月二十五日 午前一時二十五分、今上天皇葉山御用邸に於て崩御せられた。宝計四十八才に渡らせ給ふ。元号を昭和と改められた。

昭和元年は五日間である。

◎新帝となられる裕仁摂政宮殿下 十二月三十一日 大奥お局のしきたりを廃止された。

◎昭和二年三月十五日 大蔵省は金融恐慌発表 大手銀行休業す。

七月十八日は我が誕生日である。長子故に母の実家西津軽郡車力村上車力尾野松太郎家で生れる。尾野家は農家でしたが、一族に校長先生始め書道家、写真館、少しはインテリ系の家業す。

◎昭和二年七月二十四日、文壇の鬼芥川龍之助自宅で服毒

自殺す。行年三十六才『ある旧友へ送る手記』と題した原稿と遺書が残された。

その時代、娘身売り始まり、東北六県、△芸者二千九百十六名、△娼婦四千五百二十一名、酌婦五千九百六十一名、△女給三千二百七十一名等々、全国で五万人を数える。多くの娘達は難儀をして、結核等伝染病で命を落とす者が多かった。

◎昭和六年九月十六日、満州事変勃発、奉天郊外満鉄線路庁側一・五米を爆破、日支両軍衝突、『関東軍満家領有計画』による総攻撃を開始した。

◎昭和六年十月五日、『初の太平洋無着陸飛行達成』、四百五十馬力のミスピード号、青森県淋代を四日午前七時飛び立ち、七千九百十キロ、四十一時間十二分 シャトル郊外ウリナツ飛行場に着陸した。

◎『昭和六年東北・北海道大飢饉発生した』、一粒の米・麦無く、ジャガイモ、豆、南瓜も少なく、野山の蕨、ワラビの根、野生の芋、クズの根掘り尽し、飢死者続出せり。昭和九年又大飢饉の年であった。

これら飢饉の時、路上に飢死者続出し、見晴しの良い景勝地求めて川倉賽野河原あたりに行倒れ、イゴク穴等で死者を葬って居ました。

当時の古老の話によると、賽野河原の東の地点、旧七夕野牧場現運動公園付近には狼が居て死者をむさぼり喰へしたと云って居ります。私の牧場にもそれらしい狼の穴が数ヶ所有りまして。貝の地点を昔から『狼沢』の地名で、今に残って居ります。

柄であった。

祖母は旧三好村藻川の旧家木村家の出身で、一族に二代目金多豆藏、『五所川原市民芸文化財』指定の木村幸八氏がいました。

私が育った所は『後に父が分家』川倉林下白川久吉、『現戸主白川久慶氏』家であります。当時田畑耕作可成り多く、馬三頭飼育して、二頭は農耕、一頭は当時の競馬用でした。高山稲荷大祭、芦野競馬場で大へんな賑わいでした。夕飯時には全員揃って二十三名位の大家族でした。前市浦村村長された白川治三郎さんも進学の為、良く来て居られました。

旧白川徳政宗と白川忠治家の間が広場となつてゐる処である。何処からともなく、二十人前後の人が集つて来る。中立の人が双方同人数に分けて、ツルベ網の少し長い縄で綱引を始め、『ガヤガヤ、ワイワイ』と笑つたり騒いで一時間、家路へ歸る。

昭和九年四月一日小学校入学。新しい教科書は小川町北川本店まで買ひに行く。当時西郡の子供達も買ひに来て、特異な体臭がするのである。家庭の燃料として泥炭（サルケ）を燃やしている。その頃子供達は皆な目が悪く、メクサレが涙と鼻水を着物の袖でこすり、袖口がピカピカ光って居りました。

西郡の子供達は直ぐ分つて居たものです。西郡の子供達に云はせると、『金木・川倉のワラハドア檜カマリシテラ』と、云はれたものです。

小山内校長と永沢校長

中谷 金四郎

一校に校長先生の存在する期間が四年か五年の時代があった。ところが南中において小山内校長先生が八年間、これを引きついで永沢校長先生が、また在任八年に及んだ。全く異とすべき例で、同校がスポーツにおいて、一般学力において飛躍的発展を遂げる要因となった。

沼（清久溜池）の端にあった嘉瀬と、山の上にあった喜良市中が、場所は兎に角として、あわてて発足した新制中の、校舎不備に耐えられず統合することになったのである。思い切った英断というより、その時その時の要求に応じた適切な措置が評価される。

学校は一町一校がよいか、一町二校がよいか、当町が後者のコースを歩むことが出来たのは、実に南中統合の努力に起因し、両校長の良心的経営に支配されることが大きい。

昭和四十年春統合金木南中に小山内末美校長先生が着任。あつた時、五所川原からタクシーで嘉瀬へ向って走ったことがあつた。底冷えのする日であつた。途中で雪が降り出し、ついに初雪となった。この時彼は車中にて興奮し、小踊りせんばかりに人が変つた。雪を見た瞬間の彼のポーズ目の輝き、今でも絶対に忘れない。

大鰐中が移転新築した折、数人で同校を見学したことがあつた。校長先生が最後に『金木南中にはとても及ばないが、当校も、もう少しジャンプを勉強しなければ』と言つた。小山内校長先生の雪に対する感覚はすばらしかった。

小山内校長の後任に選ばれたのが永沢校長で、終始一貫藤崎町から汽車通勤された。金木南中の校長室が玄関の直ぐ左脇にあり、学校を訪れて第一着に校長にお会いできるのが、楽しみであつた。

田舎じみた生徒の言動服飾を一步でも脱皮させたいと懸命だつた。例えば女子の身なりを金中なみに出来ないものかと苦慮された。

職員に対し現職教育の徹底を期し安閑を許さなかつた。戦車隊に勤務した人に何故か長身の人が多いけれども、永沢校長も充分の威容を具えていた。正義感が強く、ノーはノーで通された。一面礼節を重んじお世話になつた先輩の墓参を怠らなかつた。

暇さえあれば役場に来て、教育委員会ばかりでなく各課をまわつて、学校をよくする営みの一つでも熱心に頼んでいた。文部省の中央講習へ行つて驚いたことは『誰がやるな』と言つた

かと、反問された一事であつた。

その意味は、校長として、あれもやっていけない、これもやっていけないと消極的になつていけるとの諷刺であつた。永沢校長の他に比肩を許さぬ魅力は、実にこの辺に存在した。散為に徹した珍しい教育者であつた。机を並べた若い人たちが殆んど校長になつた。校長が校長を生んだ。よきモデルである。

◎ 余話 喜良市男と嘉瀬女

由来は不明であるが、確かに誰からかきいたいわば名言である。人間の土地柄による特質をこのように明確に表現した例も珍しい。

喜良市男の挺子力機敏性は一般の認めるところで、津軽ヒバの伐採搬出にその特性を遺憾なく發揮した。軍人の時代は優れた軍人を輩出し、金木南中に入つても立派なスキー選手を生んで来た。

一方奴踊は嘉瀬女の持ち前で何人もそのまねは出来ない。その包容性と柔軟力は見事である。五所川原の或る老店主が言つていたが、『当地は嘉瀬の奴踊の如き名物もなく、夏になると一段ときびしい』とこぼしていた。母性として嘉瀬女に学ぶべき点はまことに大きい。

嘉瀬小学校今清一校長会議が開かれ、アトラクションに同校の女子生徒が奴踊りを演じた。梅壇は双葉より芳しで好評を博し、割れるような拍手を浴びた。紫の半纏に赤い帯、白いパンチ、可憐なそのいでたちとポーズが目につぶ。

津軽弁 村の笑い話

「私は、被害者だ」

ワンツカ、ウスケネ、あんじよのツエが、二十五になつて、妊娠したと、村人の噂が広がつた。

ツエは、独身で、何人かの若ものを相手にしているので、犯人が誰だかわからなかつた。

ズルスケの金九郎もその一味であつた。

金九郎が田圃に行く途中、ツエのオドとばつたり会つた。

オド 「金九郎、ナモ、オイのツエは、フパタベ」

今にも殴ろうとするコブシは微かに震えていた。

金九郎 「ワダキヤ、ナンモフパネジャ、ツエネカテ、フパラレダ

コトダバアルバテ」

オド 「農道の真中さ、転ばサイデ、

腹さあがられて、痛くシタテ、

シャベテレダア」

オドは、大きな目で金九郎をにらみ

つけた。

金九郎 「それダバ、ワイデネ、あのと

きツエ 『寝テ十五夜見で、ナ

ンポイイバ』といったども、

ワダキヤ石ころの上で、ヒザ

カブ痛くしてしまつただ」



(森平)

「ガッチャン・ポー」

木村治利

冬將軍の訪れは、今年はいつともより早かった。地吹雪が舞い、視界ゼロの津軽、冬の風物詩が始まった。この津軽の片隅に、今なお人々に親しまれている「ストーブ列車」が走っている。

この鉄道は五所川原市と北郡中里町を結ぶ津軽鉄道で、昭和五年十一月に創設され、二十・七軒にわたり郡北を縦断する二〜三輛編成の小さな箱型のディーゼル機関車である。

かつては蒸気機関車だったが、スピード化の波にのってディーゼルとなったもので「ポギー車」の愛称で親しまれている。この列車には、全国でもおそらくここだけであろうと思われる暖房用のダルマストーブが取付けられている。

赤々と燃えるストーブを取囲むと、いつしか干餅やスルメ、握り飯などが乗せられ、話に花が咲き愛のロマンスも生まれるという。

日雇い風のおじさんが昔を忍ぶように「ガッチャン・ポー」

も近頃は速くなった。俺ア飯詰駅でも嘉瀬駅に降りでも家まで四〇分も歩かねばなんねえから、冬には途中で雪の中さ、飛び降りたもんだ」と話す。

風呂敷を頭に乗せたカツギ屋のオカミさんは「飯詰で上下列車が交換するんで、反対側に小便するに降りた。モンペのヒモをほどいてしゃがんだら、ポーと動き出してしまった。仕方がないので走って後を追いかけて飛び乗っただ」と話せば、どつと笑い声が湧く。

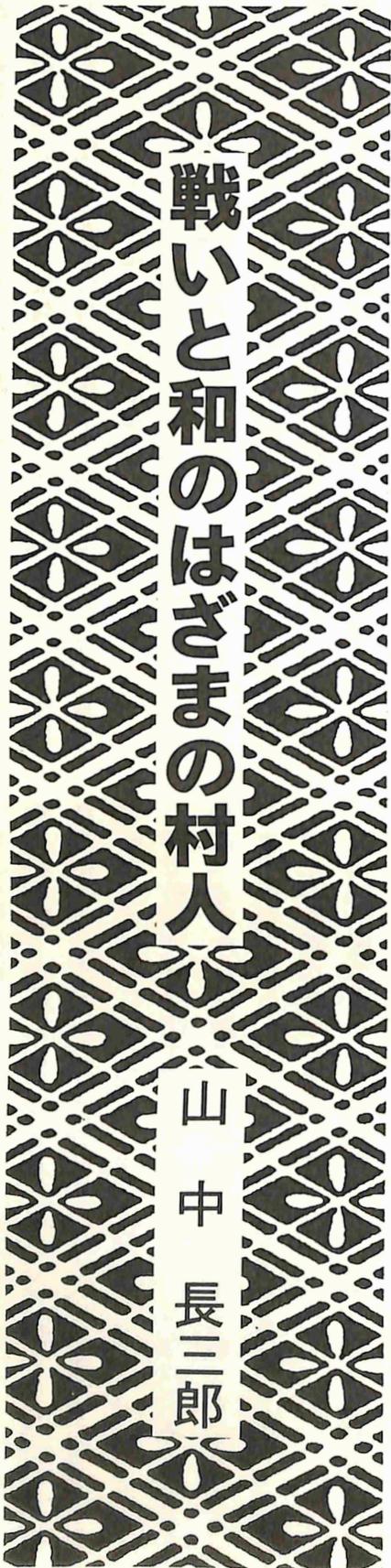
津軽の名物ストーブ列車は今日も、中山山脈を右に見て、田圃の中をゆっくり走り去っていく。

× × × × × ×

「ガッチャン」「ポー」は機関車がマッチ箱型の小さい客車を強く引くと「ガッチャン」と鳴り、動き出す。やがて汽笛が「ポー」と鳴り渡るので、この異名がある。（今は昔、昭和三十年頃の話である。）

（余説）阿部仲麻呂は唐の朝廷に仕えて秘書監（宮中の機密文書などを扱う秘書省の長官）にまで昇進されたが、望郷の念やみ難く（七五二）に帰国の途についた。

有名な「天の原ふりさけ見れば、春日なる三笠の山に出でし月かも」の歌は、彼が明州から船出する時の作である。ところが海上で暴風雨に出会い、今日の北ベトナム海岸に漂着した。その後、仲麻呂は再び唐に仕え、ついに北海開国公（大臣級）になり、三千戸を食む身分にまで栄進されたが、大暦五年（七七〇）唐で死去される。（七十三才）仲麻呂は年十六の時、唐に留学し、詩をもって知られ、玉維、李白の大詩人と交り、杜甫も知人の一人ではないかともいわれる。



戦いと和のはざまの村人

山中長三郎

「春望 杜甫」『中国の城は町を囲んでる城壁内全体』

国破山河在……………国破れて 山河在り
城春草木深……………城春にして 草木深し
感時花濺淚……………時に感して 花にも涙を濺ぎ
恨別鳥驚心……………別れを恨んで鳥にも心を驚かす

烽火連三月……………烽火三月に連なり
家書抵萬金……………家書万金に抵る
白頭搔更短……………白頭搔ば更に短く
渾欲不勝簪……………渾べて簪に勝へざらんとす